



2018年4月25日放送

印象に残る症例①

吉祥寺中医クリニック 院長 **長瀬 眞彦**

私は現在、東京の吉祥寺にある吉祥寺中医クリニックという漢方及び中医学専門のクリニックで院長をしております。吉祥寺という街は、東京都のほぼ中央にある武蔵野に位置し、井の頭公園などもあり緑も豊かなところですので是非いらして下さい。

私が漢方を始めたきっかけは、臨床的にみて、かなり体質に個人差があるような印象があるのに、西洋医学ではそこをあまり重視していないように感じられた事がまず一つあります。これはどういうことかという、例えば喘息発作の誘因一つを取っても、ある方は、冬の冷たい空気で悪化したり、また別の方は、台風や低気圧が来ると悪化したり、さらに別の方は、月経が来ると悪化したりするという厳然たる事実があるわけです。しかしながら、西洋医学では体質差による治療法の変更というアプローチはありません。ガイドラインの推奨に則って治療を行います。一方、漢方では、証に合わせてそれぞれ、麻黄附子細辛湯、柴朴湯、桂枝茯苓丸などを用いるという手段があり、実際にレスポンスであれば有効であることを知りました。この経験によって、漢方も、患者さんの苦痛を軽減する為に有用な医療の一つであることが、外科手術や抗生剤という有用な手段を持つ西洋医学と同様に、実感出来たからです。

また、もう一つは、私自身が、研修医の時に針刺し事故で急性C型肝炎に罹患した経験があります。この時は、インターフェロン治療で幸いウイルスは消失したのですが、その副作用を経験し、「ウイルスが消失したことは西洋医学のおかげだが、もう少し穏やかな治療

法もないものだろうか？」と感じたことです。

これらの経験から、現在では、漢方及び中医学、鍼灸治療を中心に、必要であれば西洋医学的治療も併用した診療を行っており、小児からお年寄りまで、またかなり幅広い疾患を診させて頂いています。

今日はその中の、小児の一症例をご紹介します。疾患は、ADHD（注意欠陥 多動性障害）です。ADHD では、不注意、多動性、衝動性などがみられ、これらに対しては環境調整が基本です。また中枢神経刺激薬や選択的ノルアドレナリン再取り込み阻害薬などが使われることもあります。年齢が大きくなるにつれ、学校や職場などで不適應を起し、二次的にうつ病や強迫症状、精神症状などを呈することがしばしばあり、長期にわたる向精神薬の服用を余儀なくされることも珍しくありません。

症例は 5 歳の男の子です。保育園に通園していますが、衝動的に体が動いてしまう。また、嫌な事があつたり、ストレスがかかるような事があると、他の園児を引っ掻いたり、噛み付くことがあるとのことでした。近くの精神科医に、ADHD の疑いと診断され、アトモキセチン塩酸塩（ストラテラ）を処方され、内服中です。しかしながら、あまり症状の改善がみられないとのことで、漢方薬を希望された母親に連れられて、当院を受診されました。

その子は、身長 113cm、体重 21kg、BMI 16.4 で、主訴の他には、便秘がひどく、3 日から 4 日に 1 回しか通じがないそうです。また、足先が冷たく、乗り物酔いもあるとのことでした。診察中は比較的大人しく座っていました。舌証はやや紅で、脈証はやや細。腹証は軽度腹直筋の緊張があり、ややくすぐったがりでした。

症状からは、自律神経の機能失調が強く示唆され、また、くすぐったがり、ということよりツムラ小建中湯を 5g/日、分 2 としました。ちなみに、自律神経は、東洋医学的には“肝”という臓腑の機能の一つとされています。しかしながら、やや症状が改善しているようですが、今ひとつであったため、初診から 9 ヶ月後に、便秘が酷いこと、また、カーッとすると症状が悪化することを目標に、ツムラ三黄瀉心湯を 2g/日、分 2 で開始しました。すると、週 2 回しかなかった排便が、1 日おきに出るようになったと共に、衝動的な行動が減ってきました。まず家でキレることが減ってきて、さらに保育園でも我慢することができるようになり、他の園児に手を出すトラブルが無くなりました。また、運動会の練習もみんなと一緒に参加できるようになりました。このように明らかに効果があった為、その後、経時的に、5g/日、分 2 まで増量しました。小学校入学時に、緊張するような状態が増えた時に、お母さんが症状の悪化を心配されましたが、大きな問題を起すこともなく乗り越えました。2 学期に入ってからだいぶ落ち着いてきて、避難訓練もなんとか参加できるようになりました。そして初診から 2 年後には、授業参観できちんと座っていてお母さんも驚いたとのことで、現在も治療を継続しています。

三黄瀉心湯は、大黄 3g、黄芩 3g、黄連 3g の 3 種類の生薬から成る、シンプルな方剤です。漢方の世界では、一般的に、構成生薬の種類が少ない方剤ほど、シャープに効くと言われています。もちろん例外もあります。この方剤は「金匱要略」を原典とし、その中の「驚悸吐衄下血胸満瘀血病篇」に、「心気不足にして、吐血、衄血する証」に用いるとの記載があります。清熱・瀉火解毒作用が主である、構成生薬を見ても、実熱（実火、熱盛）に対する基本処方であることは明らかです。

また、著名な江戸時代の漢方医、目黒道琢はその著書「餐英館療治雑話」の中で、三黄瀉心湯について、「此の方は心下痞して、大便秘し、上気するを目的とす。並びに一切上焦体部以上に蓄熱あり。或は口舌瘡を生じ、或は逆上して眼赤き者、皆大便秘を目的とすべし。」と述べています。便秘があり、上気する者の中にレスポnderがいるということです。

本症例の場合は、考察すると、便秘による熱結、実熱があったと考えられ、「嫌な事があつたり、ストレスがかかるような事があると、他の園児を引っ掻いたり、噛み付くことがある」という症状は、上気と捉えることが、可能だと考えます。

さて、三黄瀉心湯のキードラッグとなっている大黄の生薬学的な薬効ですが、本症例のように身体上部の蓄熱を冷ます以外には、承気湯類で期待されるように「熱積の便秘」に対してや、茵陳蒿湯で期待されるように「湿熱による黄疸」に対して使われます。また芍薬湯で期待されるように「湿熱の下痢」の治療、さらには治打撲一方で期待されるような「活血化瘀の働き」もあります。その上に、熱証の出血に使われたり、また、これは中国人の中医師に聞いたのですが BUN（尿素窒素）低下作用もあると言われていています。よって大黄は単なる下剤ではありません。このように構成生薬の薬効が頭に入っていると、どうしてこの方剤には大黄が含まれているのかという意味が分かり、臨床的により方剤の応用が出来るようになります。そのことも知って頂きたいです。

三黄瀉心湯はこのように、便秘を伴う精神神経症状に有効であることがあります。また、向精神薬を服用中の便秘の人に、桃核承気湯と同様に有効であることもあります。

漢方薬をレスポnderに適切に処方すると、本症例のように西洋医学的には考えられない症状の改善をするケースもあるということです。

ADHD の症状でお困りの方や、ご家族も多くいらっしゃいます。漢方診療はその助けになる可能性があると思います。

本症例の提示が、明日からの先生方の診療のいくばくかのご参考になれば幸いです。